

何等標本を示す事は出来ないが、之に極めて近い考を得るものを示すまでにはなつてゐる。何となれば、方形の古代印度貨幣に之を多く象つてゐて、その中には紀元前四世紀に溯るものも多いからである。(乙附圖第一) 之に印刻してある數多の象徴の中に、蓮花、ナンディパダ *Nandi-pada* 四種の聖獸を別としても、樹、輪、塔が已に重要になつてゐる。或場合では大部分にもなつてゐる。この佛教美術の古標本を見れば、その簡單幼稚なのが肯かれるので、之以上の略圖は想像も及ばぬ所で、圖といふよりも寧ろ象形文字といへる位である。然し印度では、習俗の著しい事として、數百年の久しい間、信者はこの幼稚な表現で満足し、美術的手段の乏しい所を想像で補はざるを得なかつたのである。

元來、貨幣は、出来るだけ單純で、及ぶ限り或型を取つた形式を要求して來た事を忘れてはならない。今、浮彫を見れば、その圓形や額形がある中には、貨幣程略圖になつてはゐない。直ちに、サーンチー *Sanchi* の丘上にある古代の佛教的印度を今日に傳へ得た最も美事な全景(乙附圖第七以下、及び丙